

2. 学年同和問題意見発表会

(1) 全校で同和問題意見発表会(6月20日)が持たれる。これは各学級から1名代表者がでて全校生徒の前で自分の意見を発表するものである。私たちは、全体学習の延長として、また全校の意見発表会の予選的なものとして学年の意見発表会を持つことにした。「今までの同和問題学習から得たもの」、「自分と同和問題とのかかわり」といったテーマで今の思いをそのままに綴らせ、6月6日に2時間をとって各学級から3名、計15名の意見発表とした。

(2) 取組み

それまでの全体学習の場においては何名か部落宣言をした生徒がいた。この意見発表会において3名の地区の生徒が新たに自分が地区出身であることを宣言していかうとする。

○ ある学級ではそのことを学級の問題としてとらえ、Y子が宣言をすることについて話し合った。「まだ、早い」という意見がある。「Y子さんが発表するというのなら、私たちはそれを支える」という意見がある。みんながどう考えるか、どうすべきかを自分の問題として考えていった。「今日6時間目にYさんのこと中心にして話し合いをしていたけど、こんなことしてYさん大丈夫かなと思った。でも、Yさんはあまり気にしてない様子だったし、私は自分の考えを言った。私にとっては一番仲のいい友達だし…。頑張っって欲しいと思う。みんなが、本当に真剣になって考えてくれているのが自分のことのようにうれしかった。」というK子。当日のY子の発表をドキドキしながら見ていた級友の姿があった。「今日の意見発表を聞いて、やっぱり同じクラスのYさんののが心に残った。いっぱいいっぱい、私は同和地区ということをいつていた。びっくりした。でも、すごいと思った。でもYさんが、どれだけ自分と闘っているかがわかったように思います。私も友達として一緒に頑張る。」一人の部落宣言を一人のものに止めない活動を目指していかなければならない。そこから、支え、支えられるということを考えていきたい。

○ M子は昨年の全体授業で自分の思いを語ろうとして涙につまった生徒である。そのM子が言葉にだして自分の気持ちを話そうとした。

「いろんな人の意見を聞いていてなんかM子さん変わってきたなと思った。初めは自分の出身地を言って泣いて、ほれから差別されたことを言って泣いて、自分の本音言って泣いて、なんか、ちょっとずつ強うなっていくきよる。」と友達の感想にある。

M子は自分の発表の意志を担当に伝えた。担任はM子の意志を確かめ、家庭訪問をし、母親とそのことについて話し合う。母親は、どちらかと言えば消極的

であったが本人の気持ちを尊重し、部落宣言をしていくことに賛成をしていった。そこまで、担任との間でいろいろな話合いがなされ、母親の受けてきた差別の実態も語られた。「先生、私、せこい。もう、よっぽどM子降ろそうかと思った」と、涙ぐみながらの先生の話である。私たちは生徒によって教えられ、担任によって支えられていく同和問題学習であることを痛感していく。

当日、M子は顔を挙げ自分の思いを語っていくが、「お父さんやお母さんは……」と続けようとしたときにつまってしまった。下を向き、言葉がでてこない。自分のことは胸張って話すことができるようになっても父母の思いに触れようとすることは何よりも苦しい。そんな差別の現実を改めて知らされていく。見ていた教師や級友から「頑張れ！」の声もかかるなか、意見発表を終えた。

「Mさんが泣いたとき、僕は『泣くな！』と思った。でも、聞いていて『泣いてしまうよな』と納得した。ただみんなはどう思っているか知らないけどMさんの後、YさんとEさんが泣いた。僕はそれがいやだった。YさんやEさんがいやなのではない。あの涙がいやだった。僕はM子さんのことを思っているのだったら『M子さんが泣いたのなら、私はあの涙を無駄にしないように、私が泣くのはよそう。』そう思って欲しかった。」これは、同じ地区出身の男子の言葉である。どちらかと言えば、行動面でも問題があるH男の言葉であった。そこからまた、新しい出発がある。

M子の次の日の「あゆみ」

「意見発表会、やっと終わりました。あの言うまへの緊張感が何とも言えないくらい、ソワソワしていました。言い終わった後、先生達から『本当に良かったよ』と言われてうれしくなりました。私の思いが通じたのかなって思いました。A先生から『なんか、ふっきれたような顔しとるわ』と言われて、本当に私もなんか気持ちがふっきれたようでした。先生、こんないい機会を与えてくれてありがとうございました。」

以上、意見発表会にかかわる二つの事例を挙げた。その他にも、発表会を契機とした多くの取組みがあった。意見発表会を意味あるものにしていくためには、形式的なものにおわらせないためには日頃の活動に組み込まれ、その一環としての位置付けがなされていることが大切である。

○ M子の意見発表は全校の代表にも選ばれた。以下、その全文である。

私は小学校の時から学習会にいていました。小学校の時、学習会で先生が「どうして学習会に来よるかしつとるで」と聞かれたことがありました。その時私はその意味がわかりませんでした。

私がその意味を知ったのは中学校に入って1年生の時の弁論大会の時でした。

それ迄知らなかった私は目の前が真っ暗になるくらいに大きなショックを受けたことを思いだします。今思えば大きなショックを受けたということさえ部落問題に無関心だった自分が恥ずかしくなります。自分が地区出身だと聞いたときから私は「隠していこう」と思いました。しかし、2年生になって全体学習という、体育館に全クラスが集まり、一クラスだけが教室の時の状態で部落問題の授業をし、あとのクラスはその授業を周りで見ているという授業をするようになり、急に部落差別についての授業が多くなって、その度に私はとても気が重い1時間を過ごしました。何度も学校を休もうかと思いました。でもだんだんそういう風に思わなくなりました。それは全体学習の時の友達の見聞を聞いたときです。みんなの意見が私を強く支えてくれました。それと同じに自分の心が、地区出身でなかったら絶対部落の人を差別していたと思います。

最近の全体学習で「親が、あそこに行ったらあかん、と言う」とか聞いて、そんなにまで部落の事を差別されているんだなと思うととても悲しくなりました。そして、「親が言っている」という子はどう思っているのかと思いました。親に同意するのか、それともきちんと自分の意見を持っているのか、どちらなんだろうと思いました。私たち板野中学校3年生は、多分、今しているこの全体学習のお陰で自分の意見を持っている人が多いと思います。そして、そんな子が羨ましくなりました。

私は家族で部落問題について一度も話したことがありません。話そうと思っても、祖母や父は嫌がります。昔にあった、つらい事や悲しいことを私は教えてもらって、そんな風な思いをなくすために差別解消に向けて一生懸命に頑張っていこうと思いますが、そんな思いであることを知った以上、聞けなくなるのです。

今みんなで部落問題の授業をしています、私たちが大人になったとき、いましていることで部落問題はなくなっていると私は信じています。今の祖母や父は少し差別心がありますが、私たちの心の中にもないと言いきれものではありません。しかし、私たちは差別心をなくするために一生懸命頑張りしています。私が大人になって部落差別にであつたとき、今までの私は差別から逃げ出すことばかり考えていたと思います。しかし、同和問題の授業を受けだして、私は逃げるのではなく立ち向かっていくという強い勇気が湧いてきました。それはみんなが真剣に考えている姿を見て、このままではいけない、自分も強い心を持って立ち向かっていかなければと思ったからです。最近、友達と中学生になって初めて学習会にいきました。今まで学習会をずっと休んでいたのも、みんなと話し合いなどしていなかったから、地区の事で自分一人で悩んだりしたこともありました。でも学習会に行ってみるとみんなの意見を聞いていると、私には仲

間がいるんだ、決して一人ではないんだと強い気持ちになりました。これから
は私たち同じ仲間どうしが支えあい差別をなくしていくためにともに闘い続け
ていくつもりです。

3. 学習会への参加

(1) 願い

「同級生を信頼し『僕は部落出身です』といえることがとてもうれしいです。
信頼できる友がたくさんいてとてもうれしいです。今まで部落問題学習をしてき
て、自分をさらけ出すことで、友達の大切さというものを学びました。この学習
をする中で、自分がすごく変わってきたように思います。今、僕はみんなに部落
出身ということが言えて、言いたいことが言える。今の状態だったら、僕は自分
をさらけ出すことができると思う。でも、その後僕はどう行動するのだろうか。
その場に立ってみななければわかりません。これからいろいろ部落差別にあうかも
わかりません。僕は部落出身という重いものを持っている。大切な故郷、友を大
切に堂々と頑張ろうと思う。」自分が友に支えられている感じるときは、自分も
また友を支えているんだという実感。

地区の子供達が差別に向かい闘っていくために、自分を語りさらけ出していく
には大きな支えが必要である。地区外の友との本音の話し合いから生まれてくる
信頼と友情。それは、全体学習や学級の同和問題学習の場で、生まれつつあるよ
うに思う。ところが私たちはこの学習を進めていく中で同じ立場にある、地区出
身者どうしの同和問題についての話し合いが意外に少ないことに気がついた。お互
いに触れたくないという暗黙の意識が働いていたのだろうか。このことは、同和
問題意見発表会において部落宣言の問題について取り組もうとしたときに表面に
でてきた。

「従兄弟が同級生にいる。仲も良いし、何でも話すけど、同和問題については
あまり話したことがない…。(地区出身の)みんながどう考えているのか知りたい
し…。みんなの考えを聞きたい」というM子。部落宣言をしていくには、それ
を支える同じ立場の友の存在が不可欠である。同じ地区出身といってもみんな家
庭環境も違えば考え方も違う。一人の部落宣言は双方からの支えがあって初めて
意味を持っていくものである。そのための働きかけが必要になる。

(2) 学習会の場を通して

本校においても同和教育主事を中心に学習会は毎日積極的に行われている。私
たちも月2回程度の割合で学習会に参加し、主として学力保証のための教科指導
にたずさわってきた。

ただ、日常の学校生活の忙しさの中で今自分たちの学年の子供たちが学習会における同和問題学習でどのようなことを学習し、学級や学年全体とは違った同じ立場の子供たちの中でどういったことが問題であり悩みであるかということについて、直接的な理解はないままに過ごしてきた。

そんな時、月何回かの学習会における同和問題学習を積極的に買って出て地区の子供たちと話し合う機会を作っていたのがS先生とM先生である。それに誘われて他の3年の先生たちも同和問題学習に参加するようになった。その中で当たり前のことであるが、同じ立場と一まとめにする考え方に問題のあることも実態として掴むことができるようになった。親の考えの違いが大きく子供たちの影響している。根本の思いは同じであっても言葉や行動には違いが出てきて当たり前である。何度も何度も話を聞いていく取組みがみられた。

ちょうどそんなときに上記の学年同和問題意見発表会に臨むM子の問題が出てきた。M子の問題は一人M子だけのものでなくいくら小さく見ても同じ地区の子供たちの問題として考えねばならないし、またその子たちの支えが無ければ到底M子は全体の場合での発表に耐えられないであろう。（家庭での問題については項を改めて触れたい）M子の属する地区は3年生の学習会への参加率が他に比べて低いということもあり、これ機に学年としても全体を学習会に参加させたいという願いもあった。同和教育主事と連絡をとりつつ担任として学習会への積極的な参加を呼び掛ける一方で多くの3年教師が学習会に参加していった。

（3）取組み

M子を取り巻く環境の中にいる同じ立場の生徒。学級、地域、部活動から比較的にA子に近いもの10名あまりと放課後何回か話し合いの場を持った。その中には、担任によって初めて自分が地区出身であることを知らされたB子もいれば、M子の従兄弟に当たるC子もいる。学級においても、全体学習の場においても部落宣言をした生徒はいない。それぞれの担任も話し合いに加わった。

「M子が部落宣言をすることについてどう思うか」というテーマでの意見の交換である。従兄弟のC子にすれば自分自身の宣言に等しい意味を持つ。いろいろな意見が交わされる中でM子の決意をたたえ、支えることが確認されていった。そしてここに参加した生徒達は後日、自分達の学級において部落宣言をし、行動によってM子を支えることを示した。同時に自らの生き方として同和問題に正面取り組むことの決意の表明であった。

同和問題学習は何よりも地区外の子への働きかけでなければならない。本音と本音がぶつかって差別を許さない生き方に昇華されていくものでなければならない。しかし現実には厳しい差別が存在する以上、地区の子にとっては同じ立場にある地区の子の支えは不可欠である。そのような場は学習会しかない。学習会には

いろいろな目的がある。しかし、今回のことを通じてわかったことは、何よりも地区の子供たちの差別解消への闘いに向けての連帯の場でなければならないということであった。

担任が教室で同和問題学習に取り組む以上、学習会における同和問題学習にも積極的に取り組まねば、表面だけの取組みにおわる恐れがあることを知った。

(4) 部落宣言をさせることが目的になってはならない。しかし、同和問題学習において本音が語られ、核心に触れるようになり、教師の確固とした姿勢があれば胸を張って自分を語る生徒がでてくることも多くなる。それはすべて生徒の気持ちに待つべきものである。その時、地区外の生徒はもちろんであるが、同じ立場にある生徒の支えはなくてはならない。教師としてその部分においてかわり共に学ぶことはできていく。また、その成果を学級に、学年にと広げていかななくてはならない。

4. 文化祭に向けて

文化祭の午前の部において学級単位の出し物のほかに、学年として全体合唱に取り組むことにした。185名全員で合唱する曲は、「花」と「友よ」。そして、歌の合間に詩の朗読を取り入れた。(この詩は板野町の解放文化点展において全員のものを色紙に書き展示した)ある意味においては詩の朗読が中心でもあった。

全員が同和問題学習に寄せる思いを詩で表現した。その内から、4編を選び全校生・保護者の前で朗読した。また、この全体合唱に入る前の解説文も生徒の手によるものである。

以下その前文と詩を紹介したい。

私たち3年生は、2年生のときから学年全体で同和問題学習に取り組んできました。私たち3年生はこの同和問題学習によって、学級という枠を超えて一人一人が固い❶で結ばれることができました。私たちはいつのころからかこの学習をしているとき熱くなる自分に気づき始めました。ときには苦しく涙がこぼれそうになりました。そして悲しみや苦しみをみんなで共有していく中から、差別解消への願いはより強くなっていきました。

私たちの仲間の中には、涙を流しながら自分をさらけ出した友がいます。そのともを必死に支えるかのように自分をさらけ出した仲間もいます。そんな学習を積み上げていく中から、みんなの中には信頼という切っても切れない❷が育ってきたと思います。私はこの学習と一緒に取り組んできたともを決して忘れないと

思います。ずっとずっと心の支えとなって私が人生の峠にであってくじけそうになったとき、みんなと歩んだこの学習への取組みが私を励ましつづけてくれると思います。私はこの学習と一緒に頑張ってきた友に感謝しています。この気持ちはみんな一緒だと思います。この1学期、大切な友と歌いつづけた歌、「花」をみんなで歌います。

合唱 「花」

同和問題学習を深めていく中で、私たちの中にはさまざまな思いが込み上げてきました。その気持ちを友が詩に表してくれました。その詩を紹介します。

同和問題を学んで

同和問題を学んで

これほど熱くなったことが あっただろうか

同和問題を学んで これほど命の大切さを考えさせられたことが
あっただろうか

涙を流しながらも 語ってくれた仲間がいた

そんな友を見て と学びたい そう思った

勇気を持って

丸岡さんと出会ってよかったと思う

「ふるさと」の詩を読んだとき

私の中で 革命が起こりはじめた

きっと みんな同じだと思う

「ふるさと」の詩が私に勇気を与えてくれた

私だけじゃないだろうけど

心からあふれてしまうほどの勇気を

丸岡さんからもらったと思う

革命は始まったばかりだけど

みんななかえきれないほどの

勇気をもって頑張っている

丸岡さんや「ふるさと」の詩に出会えてよかったと思う

痛み

苦しいとき 悲しいとき

自分が悲劇のヒロインにでもなったように

自分が世界一苦しいかのように 涙を流す

でも、ほんとうにそれでいいのだろうか 同和問題
涙を流すだけではだめだ 人の痛みが自分の痛みになり
そして、一粒一粒の涙が喜びの涙となるよう
今、団結しよう
悲しみが喜びに変わるまで

涙

「部落」という言葉を聞いて
心が重たくなるのはなぜだろう
悲しくなるのはなぜだろう

この差別のために何人の人が苦しみ
何人の人が涙を流しただろうか
そして何人の人が自らの命を絶つただろうか

私は「部落」を作った人
また「部落」を差別するすべての人を
決して許さない

私たちが流した涙は いつか川をつくるだろう
そして部落差別と大きな悲しみを
水と一緒に流してくれるだろう
どこかへ消してしまうだろう

私は解放の主体者として闘いつづける
部落差別解消の日まで

私たちの大切な友にこの歌を贈ります。「友よ」

合唱 「友よ」

そしてこの歌や詩を県中学校同和教育研究大会においても披露する機会が与えられた。次は大会を前にした、一人の地区の子の作文である。
『文化祭のときまで練習していましたが、またこのような形でできるとは思いませんでした。文化祭で歌ったとき感動したことを思い出します。またあのときの感動が戻ってくると思うとドキドキします。今まで全体学習をしてきてみんな一

つになって勉強してきましたが、こんな形になってやれば一段とみんなの心が一つになっているような気がします。

今日文化祭が過ぎて一回目なので声がなかなかでませんでした。今日はまだ声が小さかったけどこれから何度も練習して、たくさんの先生たちに私たちの取り組みをわかってもらい、徳島県全体に広げ、四国そして全国の人にもわかってもらいたいのです。私たちが今までやってきた全体学習も、もしかしたら全国の人がしてくれるかも知れません。たくさんの先生方が来る中には私たちが2年生の初めにやった全体学習を見た先生もいるかも知れません。私たちはここまで成長したということ、精一杯歌にたくしこれまでしてきた学習をわかってもらいたいです。これで最後になるかも知れません。一生懸命頑張って心を込めて歌いたいと思います。板野中学校にきてS先生初めたくさんの先生にあえて良かったと思います。板野中学校にきて私の人生は変わったような気がします。』

同和問題学習によって得た自分の思いを詩にたくし、歌を歌う。単なるショーとしてではなくこれだけの気持ちを込めて歌うことができるまでに成長したことを何よりもうれしく思った。うなずきながら聞いてくれた、という参観者の姿に子供たちはどれだけ勇気付けられたことかと思う。

「友よ」の歌は私たちのシンボルとなった。

5. 学年通信「ねんりん」

昨年度学年通信「ねんりん」の発行は300号を数え、学年末には1年間のものを縮小印刷したものを製本し配布することができた。今年も多くの人々の支えや励ましの中で3月10日現在で330号まで発行することができている。今年もまた、年度末まで発行を続け卒業時には1冊に製本し記念として配布したいと考えている。

(1) 学年通信発行のねらい

- ① 第1のねらいはまず家庭との連携にあるが、家庭や生徒への一方的な指示や連絡におわることなく、教師・生徒・保護者の互いの願いや夢思いを語り合う場として考えていきたい。特に同和問題についての啓発や互いの感想などを積極的に掲載していくことにより、同和問題学習についての側面からの雰囲気作りを強力に進めていく。
- ② 中学3年生は最高学年として、自覚と責任を持って学校をリードする立場にあると同時に、個人的な問題としての進路の選択に関する不安や焦燥、迷いがある。進路決定の問題は本来個人的なものであるが、ゆれ動く姿は共通のものである。互いの本音を通信で紹介していくことによって連帯感も生ま

れ同じ悩みを持つものとしてスクラムを組んで進むこともできよう。そのための足場として活用していきたい。

- ③ 保護者にはわが子の眼を通してのみの中学3年生でなく、生徒の日記、作文、学校生活の断面などから広く中学3年生を知ってもらいたい。わが子だけでない15歳を感じ、仲間の中で生きる、生徒のありのままの姿をつかんで欲しいという願いがある。
- ④ 生徒は学校行事にたいして受け身になりがちである。受け身の姿勢からは得るものは少なくなる。それを払拭し、行事の意味を問い、自らの行事として積極的・主体的に取り組むための働きかけや事後の反省などを取り上げることで、より活力のある学校生活を送るための一助としていく。
- ⑤ 私たち教師集団の学年学級経営の共通理解の場であるとともに、日々の反省と明日への指針を示すものであること。

(2) 留意点

- ① 「ねらい」の根本が「互いの思いを語り、ぶつけあう場」である以上発行回数は多いほうが望ましい。また、ワープロで打った、見た目に整った通信よりも手書きの方に親しみを感じるという意見の多いことを頭において発行を続けるようにした。
- ② 継続させてこそ意味がある。しかも、他の校務をおろそかにすることがあってはならない。学年通信はあくまで、教育活動の補助的手段であって主要なものではない。日常の教育活動の充実の上に立つ通信であってこそ初めて意味を持つものである。その、限界をわきまえた発行でなければならぬ。
- ③ 学年通信の場合はその作成、発行について学年教師集団の共通理解の上に立つものでなければならない。一人の教師の思い込みや一方的な記事は避けなければならない。常に、学年教師集団に受け入れられ、指示されるものでなければならないのはもちろんのことである。学年教師集団がまちわびるような通信の作成を心がけていきたい。
- ④ 内容については、生徒の声を中心にしつつもできるだけバラエティに富むよう心がけることである。私たち教師の本音の「声」などは欠かすことができないだろう。単なる行事の解説におわったり、説教調のものばかりではすぐ飽きてしまう。しかし、それが生徒に迎合した内容になってならないことはもちろんである。
- ⑤ 個人名をだすときは慎重な配慮が必要なことは言うまでもない。他の学級の場合は担任の判断を得て載せるようにした。

(3) 生徒・保護者の声から

- 中学生ともなれば、とくに男子の場合はその日のできごとなどは話題にしないのですが、この2年間は「ねんりん」を通じて安心して子供たちの様子が見られたり、明るい職員室の風景も覗かせていただいたり。時には「ねんりん」の話題で食卓の料理が一品増えたような賑やかなこともありました。それも形あるものにしていただけるので大変喜んでいきます。きっとよい記念になるでしょう。大変お世話になりました。
- 学年通信「ねんりん」を2年間ありがとうございました。お陰で子供たちの気持ちや様子、先生方のこと学校の行事などよくわかり楽しく読ませていただきました。ただ父兄の投稿が少なかったのが残念ですね。
- 先生のユーモアとウィットにとんだ文章。素直な自分をだした生徒たちの「あゆみ」。気取らない温かい文面に朝の忙しい一時を忘れ心みながら読ませていただいております。子供も中学生ともなると学校生活の多くを語ろうとはしません。だからこそ「ねんりん」によって得られる安心感と信頼感は何にも代えがたいものでした。
- 最近師弟の間の温かさが薄らいでいく中「ねんりん」を通して教室から、職員室、保険室、生徒の「あゆみ」から昔感じた温かいなつかしい雰囲気が私たちの家庭に伝わってくる。ほんとのありがたいものでした。眠気を我慢して机の前で遅くまで頑張れた子、ぜんぜん書けなかった「あゆみ」が「ねんりん」に載る楽しみさえ味わうようになった子、あの力強い先生の熱心な教えに応えられなかった子。それも思い出として、この2年温か味のある家庭的雰囲気の中で勉強し培った心意気を卒業しても十分発揮して欲しいと思います。
- 私は毎日のように出る「ねんりん」をずっと1号からためています。「ねんりん」を読むのが好きで毎日配られるのがとても楽しく、またみんなの思っていることなどがわかって参考になるからです。また「ねんりん」に励まされたことも何度かありました。「ねんりん」がたまっていくたびに、どんどん日が過ぎていくなあと感じます。一枚に一日のそれぞれの思い出が詰まっているような気がします。
- 2年生から仁木先生が「ねんりん」という、先生からの連絡や、感想、出来事が書かれているものが出るようになりました。今月の行事とか友達の書いた「あゆみ」とかも載ります。3年生になって先生がワープロを買ったと言って「ねんりん」を打つのを楽しみにしていた。でも僕は先生自身の手で書いた字の方が読みがいがあるように思えました。でも、この「ねんりん」も卒業したらもらえなくなる。ちょっと寂しいような気がします。

あ
や
み
より

何かうせゝ。あの曲、私はとても好きである。でも
 取柄ひいて、のどの調子が悪いので、うたえきれ、かも知れな
 いか。できるだけ頑張ってみようと思つゝ。」

今、今日も先生の練習がある。私は自分なりに頑張り
 ました。思つて、私は「この友」という曲ですごく好きにな
 った。なほ三年生のけしなにはあはまるからだ。なほ
 三年生のけしなと一緒にうたひたいと思つて、19日は私を
 かき連れ合つて歌う友はかり。私たちの熱い想いと少
 数の人教をもつた感じがしていいと思つて、19日はまた
 みんなとの絆を深めることができましたように頑張りまし

日にも、ひうするところになった。一部変えるところがあるかも知れぬが、基本的な形は変えなかつて、週日、石井中、母校でも同和教育の研究会があった。一年生ニク入の合唱があつてなかなかに評判よかったと聞かせる。校中は三年生金員をやつた。ヤニが便打うた。金員だに入退場も時聞がかかる。技術的な問題もある。けれども50名ぐらいの代表として、一校もあつた。金員をやつようが願ひた。文化祭後の感想にもあらうに、金員を取り組んで全体合唱、全練習習、だからこそ意味があるに。

※今日 先生がみんの作文も読んだけど笑え
しませんでした。なんをカという？ みんなバラバラの
よくな書いとも全部身に覚えがあらうとをう
ぞす。たとえば「さし」は、はるうまり二年の初



め、全体学習をやった頃の私よりでした。私の

現存竹史にも書いたけれど、よく覚えてゐる。先生が
 けだんというこは、さうもいつまでも、真剣に考へる時
 かくると思ふ。勉強の時間はいつてゆくのは、私の終
 暇からして、悪いヨリウツのたゞでござす。さうと人の
 差別がきらんだから、かかやりたへんだと思へいる
 しなうけど、やっぱり目の前の差別も無視しても心の中
 はモヤモヤすると思ひます。私は差別がどうしても許せま
 せん。無視してはゐるが、樂でも私にはダメせん。知ら
 ずの世の中も変へるやうと思へるのを、ムカフミとあら
 ちにあると、全部こわれてしまへいのに、と思つてこ
 があるけど、やっぱりよく考えるとき、人も、い事も、い
 はにあるので、ヤケにならずに、世界の悪い
 モーで変へてやうと思ひます。

同和問題 学問はこれからもずっと続たいか
 否かは知らないが、ふくみさん、先生達



に救ふてくれた。
自分の生まうとしてどうな
つか、この目の前にいる友も
哀切なことができるのか、さ
んな思ひを待てる。日常の
生涯の中で、いかしていい
ものだと思ふところ。

[illegible]

今、今日の夜、お母さんが夜食
 に、あみし焼きを、とて
 くれまして、うまい、うまい
 こそす。『アタにやうやく』と
 いふ。12個あるのを全部
 食べました。これをこれ

同和教育研究大会を迎えて(4)

学習フリーの枠組みが多かったし、全体学習は、要素についての感想だけに終わるように思う。

それを変へてしたのは、12月13日(木)の20の目で見え
後の全体授業からであった。その授業は、卒業といふ反
同級生が差別者になつていく現実を指摘するところから始
まつた。「……さうして学校からまた戻ると、『あの子』があり
御座います」と告げる。「あの歌やうな」と語り、さし方語です
こと、自分ばかりの人間ではないことを示すべく、「数ヶ月前まで、
に頑強つていけはずの間にも表裏……」こんな先生の語りかけで
始ました。「彼等探」「おれが美しい」「ミナコ迷つたな」「私の目
もすべてと資料も使ひ度なくした。資料の世界を考へるこ
とも、それはそれで意味もあり大切なことだ。それを彼の進母
の段階に応じて、資料(今才)も読みたいことは必至に思ふべきであらう。
それは何として、私はこの全体授業で、初めて『資料』から持
けて、自分達をかかゆる身近な問題につけて、同和問題を考へて
くみたてた。差別はない』『差別がある』と思つたのは多くの人が、
否定的意見を出して先に気づき出した。この授業はおもしろい
なだけに、この種の内容をあらためて現に今も、全体授業でも取り込
み、この授業をあける人も多い。先生達にとっても、ほじめて
同和問題を学習に取り組む姿勢もあらわに考へ直すきっかけ
になった。教える姿勢でも同じ。共に希望を語る。」と、
り、「ぼくは、誰にも胸に刺さる」と、「この世にどうも、意味がわか

から3、4時間ほいけるぞーという気になりました。十
当においしかったです。⇓ あかし焼きというのを見
とんなものか知りませんが、後藤田先生の為だ、と
持てきこまげせんか？



6 家庭訪問

生徒の本当の思いが語られていく同和問題学習に取り組んでいくために、教師と生徒、生徒と生徒が固い信頼の絆で結ばなければならないことはいうまでもない。また、同和教育が家庭でつぶされていく悲しい現実を見つめるとき、保護者とも担任教師は信頼という絆で結ばなければならない。その信頼の絆をつくる最初が、新学年早々に実施される家庭訪問だと思う。

私は本年度最初の家庭訪問から、昨年度1年間の同和問題学習の取り組みを振り返りながら、保護者と生徒、そして担任教師、その三者で同和問題に寄せる思いを語り合った。この家庭訪問の語り合いが、今年度の同和問題学習を徹底した取り組みにしていっていった。

私は部落差別の中を生きてきた苦しみや悲しみ、そして喜びを家庭訪問の場で生徒と親に語っていった。差別の中を生きてきた私の本当の思いを通して、生徒たちに部落問題学習の意味を明確に自覚してほしいと願った。このことは対象地区生徒にとっては、厳しい差別の現実を見つめることになった。

そんな語り合いの中で、初めて自分が対象地区生徒であることを知った生徒が二人いた。この世に部落問題が存在する限り、社会的立場の自覚は中学校入学までにさせてやりたいということをしみじみ思った。

一人はA子であった。まさか自分がそうだとは思っていなかったと、涙が溢れてくる。「去年、『私の目を見て!』の授業のとき、先生が部落の人間だといったときどう思った」という私の問いかけに、A子は涙を流しながらではあるが「そんな関係ないと思った」とはつきりと答えた。しかし、A子の涙は家庭訪問の間中止まらなかった。あの涙は本当につらかった。あれほどA子に悲しみの涙を流させる今までの同和問題学習とは何だったのか。そんなことを思いながらA子の家を出た。あの頃は親の顔を見るのもいやだったとA子は言う。

その日の教育記録(週録)に次のような文章がある。

《昨年度二年B組で同和問題学習に取り組む中、同和問題に対する憤りは育っていった。しかし、自分にとって同和問題が何であるかという学習、社会的立場の自覚をさせていなかったため、中学三年の家庭訪問で初めて自分の立場を自覚した。部落差別は許せないと、すばらしい生き方をつかんでいくんだと思っていたA子であったが、涙がとめどなく流れてきた。あの涙を怒りの涙、人間としてのあり方を求めていく熱い涙に変えていく営み、それがこの一年の営みである。》

あれほど悲しみの涙を流したA子が、板野郡同和教育研究大会の公開授業において、仲間の励ましの中で立ち上がっていく。まだA子の目には涙があった。しかしあの授業を通してA子は大きく成長していったと思う。翌日の生活ノートは私に同和問題学習に取り組んでいく自信のようなものをくれた。

《私は今日の発言で部落のことが恥ずかしくなくなりました。もう何のこだわりもありません。発表している時は自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、SさんやJさんが発表したのに、私だけ黙っとつてもいけないあとで思っていたんです。そしたら、自然と手が拳

がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、Kさん、Oさんたちが言ってくれて、ほっとして発表してよかったなあと思いました。泣くのは今日で終わりにします。M君とか、Tさんとかも他人の涙は見たくないと言っていたし。今日の授業で私は多くの人に支えられているなあと実感しました。みんな信じ合える仲間です。板野に生まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。

「歎くより怒ることだ」を胸にきざんで。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで「学習会の通知やもらいたあない」と歎いていた自分がばからしくなりました。これからも学習会に参加していきたいし、どんどん学習していきたいです。いつか絶対絶対差別がなくなっていると思います。何か、楽しみです。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。うれしかった。よかった。ビデオ貸してください。》

A子は板野郡同和教育研究大会の公開授業を通して確かな一歩を歩み出した。

もう一人は、B夫である。B夫も家庭訪問の日までは自分が対象地区生徒であるとは夢にも思っていなかった。私の言葉で自分が対象地区の生徒であることを知ったB夫は、涙こそ流さなかったが、目はうつろになりその瞳は焦点を失っていた。私の「つらいか。」という問いに、一生懸命首を横に振って見せるが、今まで滑らかにいろんな思いを話していた口は固く閉ざされてしまった。今まで全体学習で発言してきた思いは何だったのか。部落の仲間と共に頑張っていくと多くの仲間と思いを交わし合ったのに、自分がその部落の人間であると知ったとたん言葉を使い、何かに絶望したように動揺していく。今まで生徒たちに生きる力をつけていく同和問題学習をやっていくんだと言い続け、実践してきたことは何だったのか。B夫の動揺し悲しみの色を隠せないうつろな目は、「先生、助けてください。」と訴えているようだった。そのB夫も板野郡同和教育研究大会の公開授業で涙を流しながらも必死に自分の本当の思いを語っていくクラスの仲間の支えや励ましの中で、B夫自身は吹き出るような涙を流しながら、本当の思いを学級全体にぶつけた。B夫が語った「部落の人間ですって気軽に言える社会を目指して頑張っていきたい。」という言葉が私の心につき刺さっている。

本年度の家庭訪問は、私自身が私自身の生き方を問いただしていくものにもなっていた。あるお母さんは、私の生きざまと自分の歩んできた道とが重なったのだろう。思いがこみ上げてきて涙を流される。「お母さん、誰もが涙や流さんでいい社会にするために同和教育、徹底的に頑張るけん。」という私の話にしっかりとうなずいてくれた。その横にいたC子は次の日、生活ノートに次のように記している。

《家庭訪問の日、母は泣いた。この涙は部落のものにしかわからない。母は先生の話の中で、心の中にこみ上げてくるものがあつたのだろう。自分はあのとき、「耐えろ。何で泣くんや、くやしいんか」って心の中で叫んでいた。自分までも涙をこらえるのに必死になっていた。しみり湿った話の中、私は母につらい思いをさせる差別をたまらなく憎んだ。泣いてたまるか、差別に負けない人間になるぞ。弱い心よさようなら、強い心よこんにちは。》

C子は繰り返される同和問題学習の中で、より確かな生き方をつかんでいった。C子は将来教

職の道を目指して頑張っている。

D子の祖父は、私の思いに応えてしみじみと生きざまを私に語ってくれた。

《先生、私は九人兄弟の三人目に生まれた。家は貧しかった。小学校二年からは一切学校に行っていない。字を知らない。全く書けない読めない状態で、誰も教えてくれる人はいなかった。そんな中であつても一人で学び、字が読めるようになってきた。そして、会社を退職してからは、今まで字が書けなくて字を書かなかつた分、今一生懸命書き物をしている。そんなに長い時間同じ姿勢で書き物なんかするから、肩もこつてくるし腰も痛くなる。そんなことしなくてもいいのとおばあさんは言ってくれるが、このことは私に課せられた私が生きていく試練だと思つて書き続けている。》

D子の家庭訪問は、学ぶこと生きることの意味を考えさせられた家庭訪問となつた。人は生きざまをぶつけていくことにより心を開いてくれる。そんなことをしみじみと実感し、何か勇気のようなものがこみ上げて帰路についたことを懐かしく思い出す。

私はそんな一つ一つの家庭訪問を通して、私自身も大きな峠を越えていくことができたと思う。また、この家庭訪問によってこの一年、私の歩むべき道を私なりにつかむことができたと思う。

同和問題の学習とは教師と生徒、生徒と生徒、その互いの生きざまと生きざまがぶつかり合う、生き方と生き方を語り合う中から、差別解消に向けて生きていこうとする本当の生き方が見えてくる営みだと思う。教師の同和問題に関わる本当の生き方、そのことが授業の土台に流れない限り生徒の中から同和問題に関わる本当の生き方も語られることはないと思う。本当の思い、本当の生き方をぶつけ合うことなしに、いくら同和問題学習を続けても、常に表面的なものでしかない。自分の立場を自覚し、自分自身の本当の生き方を求めていくことは、つらく悲しいことであるかもしれない。しかし、現実には部落差別がある限り、差別の現実にはふたをしたままで、悲しみや苦しみを見つめることなしに、どうして本当の幸せが見えてくるだろうかと思う。

私は差別の中を生きてきた私の思いを通して、生徒たちに部落を自覚させ、部落をとらえさせていった。このことは対象地区の生徒にとっては、厳しい現実を見つめることとなつた。部落差別の中で喘ぎながら必死に頑張ろうとする生徒の姿、その誠実な生徒の苦しむ姿を見つめる度に差別に対する憤りは激しく燃え上がっていく。どんなことがあつてもこの歩みを止めてはならない、頑張り続けなければと思った。今しみじみと思うこと、それは家庭訪問での語り合いがあつたから、対象地区の生徒の立ち上がっていく授業が生まれてきたんだということである。